2012年度　　CARA

国　　語

注　意

1. 問題は全部で16ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その2)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. **HB**の黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の ◯ を塗りつぶしなさい。○で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答がイのとき)

1	● ㋺ ㋩ ㋥ ㋭ ㋬ ㋣

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり，折り曲げたりしないこと。

一　次の文章は二〇〇六年に発表されたものである。読んで後の問に答えよ。

なお、文中に出てくる「弾性限界」と「線形領域」という用語について、筆者による注記が次のように付されている。

クモの糸に張力を加えたとき、伸びが小さい場合は、バネ秤（ばかり）のように力に比例して伸びる。力と伸びが比例する限界点を弾性限界点といい、原点から限界点までの領域を線形領域という。弾性限界点以上になると伸びは張力に比例しなくなり、最終的には糸は破断してしまう。この弾性限界点から破断点までの領域を非線形領域という。

(1)　人間が建物の中で安心して生活し、活動できるのは、建築物に対する信頼性に揺るぎないものがあるからである。そのため、建築物の構造設計において、人間の安全性と信頼性の確保が最優先になされるのが大前提であるのはいうまでもない。ところが、最近、マンションやホテルの建設において耐震強度が偽装されて、震度五強以上の地震には対応できない構造が問題になっている。簡単な手抜き工事ならしばしば見られるが、今回の構造設計の段階で起きた偽装問題は人間の命の危機に直接つながっているところに大きな違いがある。本来は生命を預けて安心して生活できるはずの住空間にとって、[1]このようなことは極めて深刻な問題である。日本のような地震国では、しばしば発生する地震によって建物が簡単に倒壊してはどうしようもない。

(2)　いつ何が起こるかわからない自然界で、芸術的な構造物の中で生死と直面しながら活動している代表的な動物にクモがいる。ここで、クモが厳しい自然環境から来る危機にどのように対応しているか、危機管理の視点から考えてみたい。危機にソワグウして巣から逃げ降りたり、巣に飛来した獲物を捕獲したりする際にはクモは必ず命綱としての牽引糸をつけている。クモが非常に細い命綱にぶら下がっているのを見て、人間は糸の強さに感心してしまう。クモの糸には何か隠された秘密でもあるのだろうか？

(3)　私はクモの糸の研究を三十年近く続けてきた中で、クモの命綱に最高に効率的な安全性と信頼性に基づく危機管理システム

の原点のあることを見出した。これは次のようなものである。命綱の弾性限界強度はクモの重さの約二倍であり、また、肉眼的には一本に見える命綱も電子顕微鏡で調べると二本のフィラメント*注から成っている。命綱の二本のフィラメントのうち、たとえ一本のフィラメントが切れても、残りの一本でクモを支えることができる。つまり、一本は安全性に対する〝ゆとり〟として働いているのである。一本だけでは、いくら太いフィラメントでもどこかに亀裂が入ってしまえばクモの命の保証はない。〝二〟という数字に意味があるのだ。このように、空中で危険と隣りあわせに生活しているクモの命綱に、最高に効率的な安全性の概念が含まれていたのである。

(4) そして、命綱の弾性限界点までの線形領域を信頼できるのは、クモが正常なバネ秤のようにどれくらいの張力でいくら伸びるのかを正確に予測できるからである。つまり、命綱の線形領域でのクモの活動に関する安全性は間違いなく保証される。一方、壊れたバネ秤のように、力と伸び曲線の非線形領域ではデータの再現性が非常に悪い。そのため、非線形領域における命綱は加えた力に対する伸びを正確に予測することは極めて難しいし、破断することもある。特に、屋外で浴びる紫外線によって糸の破断強度が著しく変化するので、クモは糸の非線形領域での強度など全面的に信頼できるはずがない。このことから、クモが俊敏に行動できるのは、二本のフィラメントから成る牽引糸の線形領域に［A］の原点が付与されているためである。

(5) また、クモの危機管理は命綱だけに終わるものではなかった。クモの巣にも危機管理が十分になされていることが分かってきたのである。クモの巣には、中心部から外へ放射線状に伸びている「縦糸」と渦巻状の「横糸」がある。横糸の粘着球に飛来した獲物をくっつけて、獲物の運動エネルギーを消費させて動きを鈍らせる働きがある。また、獲物が暴れると、横糸は縦糸との接合部で切れるが、骨格である縦糸はそのままに残って、巣全体が壊れないようになっている。クモは壊れた横糸の部分だけを修復すればよい。横糸は伸びやすい二本のフィラメントから成っており、縦糸は力学強度が強くて伸びにくい四本のフィラメントで強化されるなどして安全性が確保されている。このように、クモは自らの生活の場であり仕事場である巣においても、風や昆虫などの外的侵入に対する機能的かつ効果的な危機管理システムを構築して、生命活動の維持を図っているのであ

る。

(6) 普通、我々が毎日安心して住空間で生活や仕事ができるのは、台風や地震などの外的な要因が加わったとしても、それに耐え得る強度を持った構造になっているという認識が根底にあるからである。想定される規模の地震などによる外力が建物の構造材の線形領域内に収まるような構造設計を行えば、たとえ一時的にひずんでも、外力がなくなればひずみは元に戻るというものである。その際、エネルギー消費を考慮した設計が行われている。大地震の場合などは、非線形領域であっても建物が壊れない範囲であればよい。これに対して、住民は想定内の外力であっても、偽装された建物では大きな非線形ひずみが生まれて倒壊する恐れのあることがわかったため、不安におののき、安心して仕事に打ち込むことができなくなってしまう。

(7) いくらデザイン的に斬新で見かけが良くても、建物に構造的欠陥があればいつ壊れるのかわからない。線形領域と異なって非線形領域の外力では結果を正確に予測することは難しい。近い将来、日本では十勝沖地震、阪神大震災などのような震度六から七の地震が起これば、震度五程度の耐震強度しかない建物の危険性は［ B ］を見るよりも明らかである。ここで、我々は、百％以下の安全性を論じる暇はなく、住生活では百％以上の安全性が確保されることが、危機管理の観点から不可欠である。もちろん、クモの命綱から得られた考え方では、安全率は百％ではなく、二百％でなくてはならないのであるが。

(8) クモは、活動する時には、必ず命綱で自身の安全性を確保している。もし、命綱が一本のフィラメントであれば、それが切れたら命はないので、クモは安心して獲物捕獲という仕事もできないであろう。また、クモは仕事場と住居としての役割を果たす前述したような巣の設計ならびに建築には決して手を抜かない。もし、クモが偽装した巣を造れば、小さな獲物が飛来してもすぐに巣全体が壊れてしまうであろう。そのため、活動中にすぐ壊れるような危険な巣は決して造らないのである。実際に、巣の横糸ですら二本のフィラメントで安全性が確保されており、また、骨格となる縦糸は四本のフィラメントで強化されている。もちろん、万が一巣が壊されても最高に効率的な安全性を持つシステムである切り札、命綱をちゃっかり準備しているのである。つまり、クモは［ C ］のである。ここで重要なのは、クモは自らが分泌した糸で構造物を造るので、自分で安全性が評価できるということである。このことがクモと人間の住居の大きな違いである。

(9) 一九九五年一月一七日に起こった阪神大震災は六千人以上もの死者を出した。当時宝塚に住んでいた私も被災した。人間は自分が体験するとしないとでの震災に対する受け止め方は格段に違う。私は震災の年の四月から松江に単身赴任することになり、その三月に妻と子供二人を古い官舎の中に案内しようとしたが、三人とも玄関から家の中に入ろうとはせず、結局、ホテルに泊まることになった。いくら宝塚と松江では場所が異なるといっても、被災した家族にとってはどのような家が危険であるかの判断がつくようになっていたのである。つまり、家族は官舎を自らの体験の延長線上に見ていたのである。その点からすると、我々は造りたての最新物件は、簡単に倒壊するなどとは想像もしていない。当然のことながら、建物が安全で信頼できると信じこんでしまう。たとえ、現実には欠陥だらけの建物であったとしても。

(10) 我々人間は多くの場合、業者つまり他人が造った建造物に住む。本来は、専門的な教育を受けた人間が造る建物は安全性を考慮した構造になっている、という D に立ちたいものである。古くは人間もクモの巣と同様に自らの住まいを自らの手で造っていた。【 ① 】、建物の安全性を考える上で、建物の構造の真実を十分に把握したであろう。【 ② 】、社会の進展とともに、分業システムが確立されてきた。そのため、構造設計をする人が自らの建築物に住む可能性はきわめて低い。そのような状況では、安全性に対する真剣さは不十分になる可能性がある。この分業システムでは、建物が完成するまでに多くのプロセスを経由しているため、真実が正確に伝達される可能性が低くなるという危険性を含んでいる。このようなことから、我々は科学技術社会の分業化時代には E に立って人々の所業を注意深くチェックする必要があるように思われる。

(11) 自らの住まいを造るクモでさえ、巣を構成する糸のみならず命綱に対しても、手抜き工事は絶対にせずに、安全第一、信頼第一という観点から徹底的な危機管理を行っているのである。この危機管理に関しては、予測しにくい厳しい自然環境に対してクモは本能的に F に立っているようにも思える。それに対して、他人に仕事の一部を委託する人間などは G には立てないのかもしれない。現実の世界を見ると、本能的に活動するクモの危機管理システムより人間の採用しているシステムの方が優れているとはいいがたいのである。科学技術が万能であるかのように錯覚する時代において、我々人間は建築物の真実を正しく把握しながら、四億年もの進化の歴史を持ったクモが到達した安全性と信頼性に基づいた危機管理術を見習うべ

きであろう。

（大崎茂芳「クモは建築物の偽装を見抜けるのか？」による）

＊注　フィラメント――細い線条。もともとは、電球などの内部で電流を流し、光を放出する線条をいう。

問一　傍線部1「このようなこと」のさすものとしては不適切な説明を、次のア～オから一つ選び、記号をマークせよ。

ア　耐震強度の設定がきわめて難しいこと
イ　簡単な手抜き工事とは次元の違う問題
ウ　建築物の構造設計の段階で起こった耐震偽装問題
エ　建築物に対する安全性と信頼性が損なわれるようなこと
オ　震度五以上の地震に対応できない建築物

問二　二重傍線部「ソウグウ」を漢字に直せ。

問三　［　A　］に入る最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　運動性　　イ　効率性　　ウ　危険性　　エ　強度性　　オ　信頼性

問四　［　B　］に最適な漢字一字を入れて文意が通るようにせよ。

問五　［　　C　　］に入る最適な一文はどれか。次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　いついかなる時にも対処できる他にはない資質を有している
イ　その命綱を最大限に活用してあらゆる危険を克服している
ウ　どの部分を考えても念には念を入れて危機管理をしている
エ　そのように二百％の安全性を確保しつつ、仕事場兼住居を自らの手で造っている
オ　非常に細くて強い命綱にぶら下がって獲物を捕獲する仕事をしている

問六 [D]・[E]・[F]・[G]には「性善説」「性悪説」のどちらかの語が入る。それぞれについて、アかイのいずれかを選び、記号をマークせよ。

D　ア　性善説　　イ　性悪説
E　ア　性善説　　イ　性悪説
F　ア　性善説　　イ　性悪説
G　ア　性善説　　イ　性悪説

問七 【①】【②】のそれぞれに入る最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

①　ア　そのため　　イ　すなわち　　ウ　他方　　エ　しかし　　オ　あるいは
②　ア　なぜなら　　イ　つまり　　ウ　したがって　　エ　ところが　　オ　言い換えれば

問八 本文は大きく五段落に分けるとすると、どのようになるか。小段落の組み合わせとして最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　第一段落(1)(2)(3)　第二段落(4)(5)　第三段落(6)(7)(8)　第四段落(9)(10)　第五段落(11)
イ　第一段落(1)　第二段落(2)(3)(4)　第三段落(5)(6)　第四段落(7)(8)(9)　第五段落(10)(11)
ウ　第一段落(1)(2)　第二段落(3)(4)　第三段落(5)(6)(7)　第四段落(8)(9)　第五段落(10)(11)
エ　第一段落(1)　第二段落(2)(3)(4)(5)　第三段落(6)　第四段落(7)(8)(9)(10)　第五段落(11)
オ　第一段落(1)(2)　第二段落(3)(4)(5)　第三段落(6)(7)　第四段落(8)(9)　第五段落(10)(11)

問九　本文で述べられた趣旨と合致するものを、次のア～オから一つ選び、記号をマークせよ。

ア　人間はクモとは違う知的存在なのだから、クモでさえ持っている危機管理システムを早急に準備しなければならない。

イ　クモの命綱のようなものを人間は持っていないので、建築物の真実を多方面からチェックすることができない。

ウ　クモが非線形領域での命綱の強度に信頼をおいていないのは、線形領域の再現性を十分に把握しているからである。

エ　人間はクモのように自分で自分の住むところを造るということはなくなってきたとしても、自分で自分の安全性を獲得していくようにしなければならない。

オ　クモが厳しい自然環境の中で生き延びることができるのは、本能的に分業システムを備えているからである。

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

われわれは大いなる流れのほんの一滴として存在している、しかしその一滴は後にも先にも二度とない、絶対的なる一滴でもある、ということの同時認識は、夏目漱石の有名な用語を借りていえば、「則天去私」と「自己本位」ということの同時認識ということにもつながってきます。私というものを去って大いなる天(自然、「おのずから」)の働きに則れ[a]、という「則天去私」と、この自己をこそ本分として生きよ、という「自己本位」とは、おたがい相反する考え方のようでもありますが、そうした両者が同時に成立するところに、漱石文学の大事なところがあるように思います。

具体的な作品で一例だけ挙げておきますと、『それから』という作品で、主人公がむかし別れた彼女をもう一度取り戻そうと決断をする場面があります。その自己決断は、「自然の昔に帰る」「天意に従う」という言い方で表現されています。「自己本位」というものを追求することが、「則天去私」というかたちで為されているということです。

「みずから」決断して為すことが、自然や天の「おのずから」にしたがうことだという考え方がここにはあります。「おのずから」と「みずから」という問題は、私がここしばらく考えている基本枠組みですが、もともとはこういう、「みずから」為すことと、「おのずから」成るということの重なりをどう考えたらいいか、というのが私の問題関心の出発点でした。

日本語では、「おのずから」と「みずから」とは、ともに「自(ずか)ら」と、「自」の字をもって表します。そこには、「［A］」為したことと、「［B］」成ったこととが別事ではないという理解が働いています。われわれはしばしば、「今度結婚することになりました」とか、「就職することになりました」という言い方をしますが、そうした表現には、いかに当人「［C］」の意志や努力で決断・実行したことであっても、それはある「［D］」の働きでそう〝成ったのだ〟と受けとめるような受けとめ方があることを示しています。

「できる」という言葉にも同様の事情がうかがえます。「出来る」とは、もともと「出で来る」という意味です。ものごとが実現するのは「みずから」の［I］的な努力や作為のみならず、「おのずから」の働きにおいて、ある結果や成果が成立・出現するこ

とによって実現するのだという受けとめ方があったがゆえに、「出で来る」という言葉が「出来る」という可能の意味をもつようになったとされているものです。さらには、[1]自発の「れる」「られる」の助動詞が、そのまま受身でもあり可能でもあるというところにも同じ発想を見いだすことができます。

荒木博之『日本語が見えると英語も見える』という本には、次のような面白い例が紹介されています。大学の英語教育の時間で、電話口などで言う「弟と代わります」という、ごく簡単な文章を英作させたがほとんどできなかった、と。それは、みんな〝I will change..〟と始めてしまい、そう始めてしまうと、その先が出てこないからだというわけです。つまり、それは「代わる」という自動詞を、「代える」という他動詞 change で考えているのであって、「弟と代わる」という表現では、[2]空気がかわるように、いつの間にか弟に「代わる」という言い方になっているからだというわけです。明らかにわれわれは、[II]。

※こういう言葉遣い、また発想をしているところには、さまざまな問題点が指摘できます。まずは近い例から見ておきますと、例えば、われわれに親しい小説のスタイルとして私小説というものがありますが、これは自然主義と呼ばれた作家たちが、私という「みずから」の身辺に起きたことを、「残る処なくさらけ出して」行けば、それで「おのずから」小説になるという発想で書かれたものです。

こうした発想で、「真実なれ、自然なれ」とのモットーに、どんどん「残る処なくさらけ出して」行ったのですが、そうしたさきでなされた総括はというと、「矛盾でも何でも仕方ない。事実！事実！」（[III]『蒲団』）とか、「人間の浅ましさ……けれどこれが人間である。これが自然である」（同『生』）といったたぐいの詠嘆です。そこには、誰も起きた出来事に責任を負う主体はいません。このような自然主義は、自己弁護ないし現実の無条件容認主義にダ[b]したといわざるをえません。

だからといって、[3]近代日本のある種の誠実の表現でもあった自然主義文学を全否定することはできませんし、何より問題は、われわれ自身の中に[4]こういう発想があるがゆえに、こういう文学が書かれ読まれてきたということだろうと思います。さきほどの例でいうと、「今度結婚することになりました」という言い方を、文字通り〝成り行きでそう成ったのだ〟と語ったとすれば、もしその結婚がうまく行かず離婚することになったとしても、それもまた「今度離婚することになりました」と語られてしまう。

そこには、事の当事者は不在です。[5]

こうした発想には、「みずから」と「おのずから」、自己と自然、またひいては自己と他者との暗黙のうちでの同一性・連続性が前提されているのでして、そうしたあり方が、「甘え」[*注]とも「無責任の体系」[*注]とも批判されてきたものであることはいうまでもありません。

しかし、「みずから」と「おのずから」との関わりは、そういう面ばかりではありません。「今度結婚することになりました」という言い方には、たんに当事者不在の自己弁護だけをしているのではなく、結婚相手に出会うことをはじめ、その後のいろいろな幸不幸の出来事、あるいは人の手助けをもふくめて、[6]「みずから」では及ばないところでの働きも相俟(あいま)って、やっと結婚という事態にいたったという、「みずから」を超えた働きへの感受性が表明されていると考えることができます。

幾多のすぐれた思想、思想の名に値する思想においては、そうした感受性をとぎすまし、今述べたような日本の思想の陥りやすい傾向を批判することにおいてこそ創出されています。

（竹内整一『花びらは散る花は散らない』による）

＊注

「甘え」――心理学者の土居健郎が、他者に依存しがちな日本人の精神構造を「甘え」をキーワードとして分析したことを指す。

「無責任の体系」――政治学者・思想史家の丸山真男が、天皇制のもとで責任の所在を明確にしない体制を、戦前の日本社会の特徴と指摘したことを指す。

問一　二重傍線部a「則れ」の漢字部分の読みをひらがなで記せ。

問二　二重傍線部b「ダ」を漢字に直したい。次のア～オの中から最適なものを選び、記号をマークせよ。

ア　打　　イ　墮　　ウ　駄　　エ　妥　　オ　蛇

問三　空欄 A ～ D には、「みずから」「おのずから」のいずれかが入る。その組み合わせとして最適なものを、次のア～オの中から選び、記号をマークせよ。

	A	B	C	D
ア	みずから	おのずから	みずから	おのずから
イ	みずから	おのずから	おのずから	みずから
ウ	おのずから	みずから	おのずから	みずから
エ	おのずから	みずから	みずから	おのずから
オ	おのずから	おのずから	みずから	みずから

問四　空欄 I に入る漢字二字の言葉として最適なものを、「※こういう言葉遣い」以後の本文中から選んで記せ。

問五　傍線部1「自発の『れる』『られる』の助動詞が、そのまま受身でもあり可能でもあるというところにも同じ発想を見いだすことができます」とは、どういうことか。次のア～オの中から最適なものを選び、記号をマークせよ。

ア　自分本位の発想を示す自発と、大きな外界からの働きかけを受け入れることを示す受身、そして、ものごとが成り立つ可能性を示す可能の三つが、同じ助動詞によって表現されるところに、天の働きかけにしたがうことと、自己を本分として生きることの両者を同時に成立させる、すぐれた思想性が表れている。

イ　自分の内面に入り込む傾向を示す自発と、外界からの刺激を受け入れる傾向を示す受身、そして、ものごとが無事に成り立つ方向性を示す可能の三つが、同じ助動詞によって表現されるところに、自己の内面を天の意志と同一化する認識の構造が示されている。

ウ　自分の内側からわき起こる望みを表す自発と、望まない事柄を受け入れることを表す受身、そして、ものごとがおのずから成り立つことを表す可能の三つが、同じ助動詞によって表現されるところに、自分自身の感覚よりも、天にしたがうことを大事にする精神構造が見てとれる。

エ　自分の内側から発することを表す自発と、外側から働きかけられることを表す受身、そして、ものごとが成り立ち得ることを表す可能の三つが、同じ助動詞によって表現されるところに、自分が為すことと自然にできあがることとを区別せずにとらえる思考法が示されている。

オ　自分の自覚的な意志であることを示す自発と、他者から働きかけられることを示す受身、そして、ものごとを仕上げることができることを示す可能の三つが、同じ助動詞によって表現されるところに、自分自身の意志や行為と、他者の意志や行為とを同一であると考える精神が表れている。

問六　傍線部2「空気がかわるように」とは、どういう意味か。次のア～オの中から最適なものを選び、記号をマークせよ。

ア　窓を開けただけで簡単に変わることであるかのように

イ　雰囲気が一変して全く違った気持ちになるかのように

ウ　見かけが変わるだけで、実質的には何も変わらないかのように

エ　自分自身に変化はなく、周囲が変化するかのように

オ　人の意志に関わりなく、自然に変化するかのように

問七　空欄 Ⅱ に入る文として最適なものを、次のア～オの中から選び、記号をマークせよ。

ア　「みずから」「代える」と言うべきところを、「おのずから」「代わる」と表現しているということです

イ　「みずから」「代わる」と言うべきところを、「おのずから」「代える」と表現しているということです

ウ　「おのずから」「代える」と言うべきところを、「みずから」「代わる」と表現しているということです

エ　「おのずから」「代わる」と言うべきところを、「みずから」「代える」と表現しているということです

オ　「おのずから」「代わる」と言うべきところを、「みずから」「代わる」と表現しているということです

問八　空欄 Ⅲ には、自然主義文学の代表的な作家の名が入る。次のア～オの中から最適なものを選び、記号をマークせよ。

ア　芥川龍之介　　イ　坂口安吾　　ウ　太宰治　　エ　田山花袋　　オ　森鷗外

問九　傍線部3「近代日本のある種の誠実の表現でもあった自然主義文学を全否定することはできません」とあるが、この文の著者は自然主義文学をどのように見ているのか。次のア～オの中から最適なものを選び、記号をマークせよ。

ア　「おのずから」と「みずから」を同時に成立させる日本語の特徴を生かした発想によって、天意にしたがいながら自己の意志を実現させた誠実な文学だが、そうした自己を無条件に容認してしまった点に問題がある。

イ　「おのずから」成る小説として、「みずから」つまり自己を残るところなくさらけ出した点に文学的価値があるが、自然にこだわりすぎたために、単なる詠嘆に陥ってしまった点に問題がある。

ウ　「おのずから」と「みずから」を区別しない日本人の発想法の上に立ち、自己の姿を偽ることなくさらけ出した文学だが、自己の行為に対する責任ある省察が足りなかった点に問題がある。

エ　「おのずから」という側面は自然に達成されるだろうと考え、「みずから」の身辺に起きた事柄ばかりを重点的に扱った結果、自己と他者との同一性・連続性を描き出せなかった点に問題がある。

オ　「おのずから」働きかける自然にしたがうことが、「みずから」の決断と一致するという境地をめざして、自己の身辺を忠実に描き出した文学だが、「みずから」を超えた働きへの感受性が不十分だった点に問題がある。

問十　傍線部4「こういう発想」とは、どのような発想を指すのか。次のア～オの中から最適なものを選び、記号をマークせよ。

ア　自分の意志に基づく行為を、自然に起きた出来事と十分に区別しない発想

イ　人間の真実を、身辺に残された自然環境の中に見いだそうとする発想

ウ　あらゆる現実をあるがままに容認し、肯定的に受けとめてゆこうとする発想

エ　意志や努力によって自己本位に生きようとする人間の身辺をこそ描こうとする発想

オ　自己に対して誠実に生きることを重視するが、当事者の責任追及は軽視する発想

問十一　傍線部5「そこには、事の当事者は不在です」とは、どういうことを指しているか。次のア～オの中から最適なものを選び、記号をマークせよ。

ア　他者の結婚や離婚に関与しようとする人々がどこにいるのか、よくわからない。

イ　結婚・離婚という行為が誰の意志によって行われたのか、あいまいである。

ウ　結婚や離婚が自然なことなのかどうか、明確に判断できる人が存在しない。

エ　なぜ結婚し、また離婚することになったのか、原因が不明のままである。

オ　誰が結婚し、離婚したのか、はっきりしないままに時間が経ってしまう。

問十二　傍線部6『みずから』では及ばないところでの働き」とは、どういうことを指しているか。次のア～オの中から最適なものを選び、記号をマークせよ。

ア　自然環境が人間に及ぼす圧倒的に大きな力の作用

イ　無意識のうちに発揮していた自分自身の力の影響

ウ　自分では想像も及ばなかった未来が実現することへの驚き

エ　人間の知能でははかりしれない神秘的で不思議な力の働き

オ　自分の意志の力では支配できない偶然性や他者の働きかけ

問十三　次のア～オの中から、この文の著者の考えに最も近いものを選び、記号をマークせよ。

ア　「みずから」の一滴が、自然や天という「おのずから」の大いなる流れの中にあるという認識に到達することは、かつての日本的な風土においては困難だったが、戦後においてはそのようなすぐれた思想も創出されている。

イ　「おのずから」と「みずから」を共に「自」で表す日本的な思想の伝統は、多様な文学を生み出してきたが、現在では、そうした伝統を忠実に継承しつつも、その上に新たな思想を組み立ててゆくことが求められている。

ウ　「おのずから」ことが成るはずだという楽観的な現実容認の思想も全否定することはできないが、「みずから」他者との連続性や同一性を求める感受性を身につけて、単なる自己弁護に陥らないように努めねばならない。

エ　「みずから」と「おのずから」をあまり区別しない日本人は、責任の所在をあいまいにした現実容認に陥りやすい傾向があるが、自己の意志とそれを超えた力の双方を明確に認識しつつ、思考を組み立ててゆくことが大切である。

オ　「おのずから」の力に頼るあまり、「みずから」の責任を自覚できないことが、日本人の思想の大きな欠陥であり、当事者の責任を明確に認識することによってこそ、天意や自然の力を知ることもできるのである。